

第10回 外国語コンテスト

英語部門

今回は参加者が前回のおよそ半数だったが、全体的には水準の高いコンテストとなった。内容は国際関係論から英語学習や海外滞在の経験、ヴォランティアや英語演劇についてなど、多様なものだった。審査員は例年通り本学名誉教授の池稔氏と法学部教授のジョン・ハミルトン氏で、上位入賞者は以下のとおりである。

第1位 02M3378 白 鷺 'Earth-being'

第2位 04C 8097 村瀬めぐみ

'Things I Learned'

第3位 02M3087 古澤真由子 'My Memory'

第3位 04C 8074 芳賀保美

'What I Learn in EC Class'

第1位の白鷺さんは昨年に引き続き二年連続の優勝である。第2位の村瀬めぐみさんと第3位の芳賀保美さんは現代中国学部 of 1 年生で、今回の初参加で上位入賞を果たした。同じく第3位の古澤真由子さんは昨年に続いて二度目の参加である。今回は参加者の甲乙がつけがたく、結果的に第3位が二名になってしまった。今回は経営学部の3年生と現代中国学部 of 1 年生の活躍が顕著だったと言える。

今回はロングマン ELT の協賛をいただき、上位入賞者には副賞として CD-ROM つき英語辞典 *Longman Dictionary of Contemporary English* が贈られた。なお、第1位の白鷺さんによるスピーチ 'Earth-being' の原稿を後に掲載する。

(安藤 聡)

ドイツ語部門

2003年度の名古屋語学教育研究室主催第10回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2004年11月26日（金曜日）の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟203教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回の課題は、ドイツ語の統一テキスト "Lernziel Deutsch. Grundstufe 1." の Reihe 12 の Text B "Die Fremdsprache. Ein Märchen" を選びました。「メルヘン」という副題からわかるように童話で、外国語として犬の言葉 (!) を学んだ王子の物語です。何の役にも立たないと思われた犬の言葉が王子の成功の鍵になるという内容です。童話とはいえ、過去形が多用され、話し言葉よりも書き言葉を主体にした若干硬い文章で書かれていて決して平易なものではありません。参加者にとって準備と勇気のを要するものとなりましたが、ほぼ例年通り9名の参加者がありました。審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私（島田了）の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように、内容としては決して簡単ではないテキストにも拘らず、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、予想を遥かに超える結果となりました。基本となる発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、上位入賞者の間ではさらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。非常に接戦となりましたが、今回の課題が物語であることを重視して、表現力が決め手となりました。結果は、第一位（優勝）岩田祐治君（03J1265）、第二位箕浦直美さん（03M3031）、第三位伊藤純平君（03J1166）となりました。

毎年参加者の数が他の言語に比べると少ないとの指摘もありますが、もともとのドイツ語の履修者自体が他の外国語に比べると決して多くはないので仕方ない点もあります。この点を何らかの形で工夫して、今回はより多くの参加者が集まるようにしたいと思います。しかし法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。

(島田 了)

フランス語部門

フランス語部門は、例年のごとく国際コミュニケーション学部のラッセン教授を審査員として招き、11月29日に本選を行なった。出場者は12名で、前回に比べ半減したが、このコンテストが始まり10回目にして初めて車道校舎法学部2部の学生が1名参加した。

審査はこれまで通り予選と決戦の2回に分けて行なった。テキストとして用いたのはジャック・ブレヴェールの反戦詩“Barbara”(「バルバラ」)で、予選では、あらかじめ配付されていた前半部分を全員に朗読してもらい、決戦では、その場で配付された後半部分を朗読してもらった。決戦進出者6名の中から、最終的に次の3名が入賞した。白鷺さんは、2年連続の入賞(前回は2位)である。

1位 02M3378 白 鷺

2位 03J1292 成田 愛

3位 03J1320 川瀬 匡司

テキストは、ブルターニュ地方の軍港都市ブレストを舞台に、バルバラという女性を主人公にし

て戦争の愚かさ(Quelle connerie, la guerre! : 戦争とはなんと愚かなことか!)を描いたものであるが、シュールレアリズムの流れを引く詩人の作品だけに、内容的にやや難しかったかもしれない。そのために、あらかじめテキストを与えていた予選においても、情感をこめて読むことまでできた出場者はほとんどいなかった。とはいえ、少なくとも発音面では上記入賞者のほか、決戦に残った人たちもまずまずであった。とくに決戦ではテキストを初めて見ることもあって、綴り字の読み間違いがあったが、フランス語での綴り字と読みの関係は非常に規則的であるから、普段からその関係に注意しながら勉強することが大切である。

それはともかく、コンテストに積極的に参加してくれた出場者の皆さん全員に敬意を表したい。その積極さが必ず力になるはずである。

(田川光照)

中国語部門(法・経営)

中国語コンテスト「法・経営部門」は、2004年11月18日(木)13時30分より207教室で行われました。第10回という節目の今大会には、史上最高の55名が参加しました。課題文の朗読は、応用部門が「買靴」という中国の笑い話、基礎部門が「私の一日」を紹介する内容でした。午後1時半開始予定でしたが、すでに1時頃には大多数の学生が会場に現れ、正しい発音の最終確認をしていて、開始前から会場は熱い雰囲気に包まれていました。「ともかく優勝したい」、「正確な発音をなくちゃ」、「恥をかきたくない」など、参加者はそれぞれの思いを胸に秘めてコンテストに臨んでいました。開始10分前にある参加者の提案で、参加者全員が担当者の合図にあわせて、いっせいに朗読の練習をしました。学生たちのコンテストにかけける真剣さと熱意が私たち教員にも伝わってきました。審査は矢田博士先生と鄭が担当し、結果は次の通りでした。

第1位 01S J1002 原田 大輔

第2位 02M3463 鈴木 和代

第3位 03J1198 小崎 一弘

(鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

第10回外国語コンテスト中国語現中部門は、2004年11月18日木曜日15時30分から、自由部門と課題部門の順で行われました。出場者は自由部門が6名、課題部門が28名でした。審査には、顧明耀先生と安部悟先生に加わっていただきました。

自由部門では、各出場者が自らの体験に基づいて中国語で作文したものを、情緒豊かに発表しました。厳正な審査の結果、次の1名が入賞しました。

1位 02C8228 神田 亮

神田君は、「我終生の伴侶 (私の一生の伴侶)」というタイトルで、可愛い「虾(エビ)」たちとの生活について語りました。

課題部門は、中国で有名な「エペンティのとなち話」から選んだ「至理名言 (まことにもっともな名言)」というお話の暗誦でした。エペンティが頓知で地主をやっつける様子を、各出場者が工夫を凝らしてユーモラスに発表しました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

1位 04C8065 紅林 文子

2位 04C8016 河野 純華

3位 04C8164 川原 三紗

(中川裕三)

韓国・朝鮮語部門

韓国・朝鮮語「本選」は 04.11.18(木)午後2時から開催。参加者は38名と盛況。審査には陶山名誉教授と常石が当たった。1, 2年生は従来のように「課題朗読文」、つまり学年に応じ一定の韓国語文章を朗読。しかし3年生以上は、04年度から開講された「上級クラス」に対応させ、「自

由作文発表」および「自由課題朗読」としたが、これは初めての試みであった。

審査の結果、入賞者は次の3名。

第一位 02C8050 古澤 希予衣

第二位 02J1372 小島 健志

第三位 03M3061 細江 夕輝

一位、二位が3年生(当時)であったのに対し、2年生細江君の健闘が光った。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題でした。

伝統的に法・経・現中三学部の1年生は全員参加となっています。60名近くにもなりますから予選を行います。予選で20名ずつに分かれた各クラスから3名の代表者が選ばれ、9名が本選に進みました。本選へは他の学年の誰でも出場できますが、今回は申し込みがなく、2004年11月18日、1年生9名で競うこととなりました。

アルバイトを題材としたものが多かったのですが、その内容は仕事の厳しさ、職場の暖かい人間関係、仕事に取り組む姿勢など多様でした。イントネーション、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭にスピーチに取り組みました。どれも内容豊かで、聞き手を納得させるものでした。

審査は、教員2名(架谷・梅田)、学生審査員2名、聴衆約50名の投票によって行い、熱い空気の中、3名の入賞者が決定しました。

1位 04C8184 劉呈呈「やればできる」

2位 04C8187 潘子剛「日本、ありがとう」

3位 04C8175 金海花

「日本人は優しい? 冷たい?」

また、惜しくも無冠の勝者となったみなさんは以下の方々です。

04 C 8169 崔英 04 M 3377 申永日
04 M 3380 楊森 04 C 8182 劉贊珮
04 M 3381 楊艷華 04 J 1378 劉彤旭 (敬称略)

最後に一言。外国語コンテストは1年生だけの行事ではありません。次回の挑戦を待っています！
また、日本人学生のみなさんはコンテストに参加できませんが、ぜひ聴衆として留学生の声を聞きに来てください。
(梅田康子)



外国語コンテスト入賞作



英語部門

第1位 Earth-being

(白 鷺)

Hello friends! Maybe you are wondering what “earth-being” means. I must confess that I made this English word. If you want to know more about “earth-being”, please listen to me carefully.

The first time when I heard the word was in my high school life. One day in Japanese class, the teacher said the word “earth-being”. I can’t remember the situation when she said that because I was thinking of some more interesting things than the class. But I can remember very well what she said then. She said, “If someone asks you where you are from? How will you answer?”..... (Ask the audience the same question)... My Japanese teacher said that she is from the earth, so she is an earth-being. Don’t you think that her answer is very unique?

At that time I just thought “earth-being” is an interesting idea. It was not until I took Mr. Ono’s class this year that I realized the importance of the word. We discussed “peace” in the class. We perceived that the meaning of peace is different for different people. Some people think that if everybody is happy, that is peace! But other people who are concerned more for themselves than for others will think that peace is having big power and a lot of money. If those people do have big power or a lot of money, that means a number of people will be poor or in a dangerous condition. They will think that is peace and happiness, but it will not be peace for a large number of people. Maybe war will occur by such thinking. What is the most